



素句集
全



主



雲英文庫

佛像造立の願を感ぜしめて復生
すといへども食物まじり肴菜をく
あつてよ後所の物或食するふれ
吐えし肴菜の氣味よろしく
合せし人ありし之福弁素菜を
いふなるを感ぜしる川よやよ福所
の物氣味よしくせすりやしく花を

源正義
厨

風月夜の〜氣味よ〜〜〜
〜〜〜不腹ふ〜〜〜人なり別
〜風月美〜〜〜〜腹不味をい
ふ〜〜〜文の志鳥風
〜〜〜

文政癸未年五月廿九日
書

素檠菽句集

春の部



素檠菽〜〜〜
年乃ち〜〜〜

〜日乃好おほく〜
〜〜〜あま〜
〜〜〜ほや〜
〜〜〜二日の渾

あはれなる雪の
あはれなる雪の
あはれなる雪の
あはれなる雪の
あはれなる雪の

あはれなる雪の
あはれなる雪の
あはれなる雪の
あはれなる雪の
あはれなる雪の

あはれなる雪の
あはれなる雪の
あはれなる雪の
あはれなる雪の
あはれなる雪の

霞

あはれなる雪の
あはれなる雪の
あはれなる雪の
あはれなる雪の
あはれなる雪の

万葉

あはれなる雪の
あはれなる雪の
あはれなる雪の
あはれなる雪の
あはれなる雪の

存ふよ万葉の心くく老う目に
万葉の心くく老う目に
丁寧にも葉の舞ふや松乃うけ
万葉の心くく老う目に
五六の万葉の心くく老う目に
万葉の心くく老う目に

若菜 芥薺

古くもあしき物くく老う目に

持りて葉を煮て喰ふや
おのちも二種くく老う目に
老ゆきを上るに喰ひぬせり

子曰

娘くく老う目に
君の葉も桂くく老う目に

草庵

松の葉も桂くく老う目に

黄鳥

黄鳥のさえずりて空の響きも福喜の
黄鳥のさえずりて空の響きも福喜の
黄鳥のさえずりて空の響きも福喜の

社頭

神もひてこの世も音も
梅

梅一輪の影も川も花も動く如

心も春も花も梅も春も花も梅も
心も春も花も梅も春も花も梅も
心も春も花も梅も春も花も梅も
心も春も花も梅も春も花も梅も
心も春も花も梅も春も花も梅も
心も春も花も梅も春も花も梅も
心も春も花も梅も春も花も梅も
心も春も花も梅も春も花も梅も
心も春も花も梅も春も花も梅も
心も春も花も梅も春も花も梅も

臆 臆 月

空も花も梅も一本の臆也

陪月を也あまの嶽せと流き
横より見ゆる月やを〜めて横月

長閑 若草

空月も〜もせと〜もあ
あまの〜と藤原よのまの言ふ
あまの〜と何うも〜あ
あまの〜と聞ゆる春の山
あまの〜とよきもやあ

あまの十日志のひね 小重草

柳

七種乃河や〜あゆる柳、那
ほの〜や中よあも〜柳、那
鈍れ枝乃河あゆる中よ柳

志を〜とあまの〜

旅く乃足をとるあまの柳、那
木を付て山田よあゆる柳、那

家桂一わさめ柳みさくさ

猫恋

薪さくく柳してりや猫乃暮
糸乃雪乃つらるや猫のほろ
帰せしとて火さく川宿や猫の立
尚や乃戸乃猫の葉をばさくさ

帰厂雉子

りらるるくくさくさくさ

せさういかにちさくくくさ
さくさくさくさくさくさ
さくさくさくさくさくさ
さくさくさくさくさくさ
雉子乃尾や尾ははくさくさ

春雨

雨さくさくさくさくさくさ
美さくさくさくさくさくさ

六
其乃雨鳥の足平泡々つ
ほのし中目ようらちるや虫の雨
寂く夜半にひびく響く声の雨
あつとふ乃宿ちるも春の雨

春風 春の月

ちやこてあつとひあつひあつ風
寒うつあつとあつと春の月
古里と久しとあつと春の月

あつと一葉をあつとあつと一葉を
梅雪をあつとあつと一葉を
く乃すまにならあつとあつと一葉を

菫椿

小男とあつとあつとあつとあつと
菫草くあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
散てあつとあつとあつとあつと

花 片々

吟もせぬ梅初了日初さぬ
今日乃乃名よそ冬前免初さ
初をさる腫る也乃乃理あり
娘一さよあうてもんさ梅り初
茶あ能も淋一さも夢了梅り南
集へまらこ梅乃也よ山ささ
一重よふ足らぬら種屋乃山梅

のあこさあしぬさなうささ
身一平梅すくちされり初

草庵

梅心さる也葎乃茶志也

鬮澤山

也乃中ら初もさるぬ日うけ所
蝶と抱ふ初もさるぬ日うけ所
今もさるすまもは初さる也乃宿

あつてはしるしをばさるる世の宿
ちの椽根をこしきやねをうる也

睡后

ちの椽骨もたふすよあつて免るる

小町讀

心あつてを散くも是る椽の南

桃 藤

我乃椽あつてはしるしをばさるる

暎河つら色深まらば椽乃也
知くち乃月代也〜藤乃也
松乃骨うけろふ松乃あつては

くさ〜

隙枝也也さる子乃椽子教
旅くさるるをばさるる 縣召

ゆり忌

家軒あらぬをばさるる



花の心

花の心



花の心
花の心

際さるあき若いら先よ並ふ
よしやをふまふて見ハあ乃雪
畑さあ乃あむるあつてうす
知のひあ〜心蛙の那
美然や〜の流毒をよまき口
嚙す〜て後あ〜らる者の子
今あよ居るも忘る〜胡蝶は
隙をほら〜田〜るを〜流す

初午

際ら〜き神乃名聞や午系
あ〜さま旅〜喰らるる鮎の飯
色あ〜て春を〜め〜は〜し
機〜〜あ〜き〜赤〜は〜し
山〜乃女崩〜さ〜る植根う那
花のあ〜と旅乃あ〜て〜寐〜て〜る
流る〜れ流〜し〜る春の水

寐て居てもあつゝあつゝと推す

夢の事

り先よも乃はくも也昼の月

夏の部

更衣

汗神をくもあつゝあつゝと推す
浴衣を着るや山家乃衣るえ
あつゝあつゝと推す
あつゝあつゝと推す

牡丹

紫のいもあつゝあつゝと推す

老うより桂とて原 志牡丹外
誰く、酔ふて提り牡丹の南

燕子花 名歌

いづれも初めは世へ 燕子花
燕子花夢乃後浪 残りし
卯月まへに花風とて思ふ
後にもいづれも中よる花は名歌

灌佛 螢 箒

灌佛乃此まて流ふ 少存りぬ
壽佛佛 雲よりいづれも
先勝て其好味初はしりぬ
向了花乃飲為を出る 雲亦南
井の字花 子より為して振るき
竹乃字花 二也らあふふあや
ほらきん
志川を初子規 二ふまを

今ある一や何と云ふに
四五日たふしやうに
橋也と云ふにやうに
部云

多尾

第... 紫菀を... 部云
如月... 部云
魚島... 部云
今... 部云

一... 部云
... 部云
... 部云
住人... 部云

... 部云
... 部云
... 部云
... 部云
... 部云

ほむもいふなりてよまこと
あまのこころにまこといふまこと
ほむもいふなりてよまこと
ほむもいふなりてよまこと
ほむもいふなりてよまこと
ほむもいふなりてよまこと
ほむもいふなりてよまこと
ほむもいふなりてよまこと
ほむもいふなりてよまこと
ほむもいふなりてよまこと
ほむもいふなりてよまこと

ほむもいふなりてよまこと
あまのこころにまこといふまこと
ほむもいふなりてよまこと

蟬

ほむもいふなりてよまこと
あまのこころにまこといふまこと
今月中に追出たてをみれば

閑古鳥 蟻

飛ぶやうなまはるかなり閑古鳥

くよとのいんちをいさるる閑古鳥
はぶさな蝶乃ついのちとていさむら
おのせうのいさむらふゆのうらむら

早苗 田植

投つてみくらう乃出さる苗の
まをいさるる苗を着る可き
娘しるをいさるる苗を南
田にいさるる苗をいさるる田植

五月雨 籍

五月雨や夕貞柳乃屋根の生
おのいさるる雨のいさるる
川ひらく呑くやすくといさるる
かいつのいさるる臆病よあつる日

みくら

顔あつるいさるるいさるる
いさるるいさるるいさるる

みーおの祭場もさるも 腫れ
お〜乃のやもさるも又腫れ

夏の月

あ〜乃のやもさるも夏の月
お〜乃のやもさるも夏の月
吹〜乃のやもさるも夏の月
夏乃月志も〜夏のやもさるも

扇

弱はあゝ扇もさるも寝入らるも
くも扇もさるも扇も
淋〜乃のやもさるも早海も
足あ〜乃のやもさるも

蓮

開〜乃のやもさるも蓮も
花もさるも蓮も
花もさるも蓮も
花もさるも蓮も

月夜のさあけのちかやき

蚊 帷子

あつあつ小枕強きし 蚊乃就き
子難む等しおほくつてつて
帷乃以魂乃入臥 昼寐の臥
帷子乃神是淺草の夢なる也

暑 涼

家より人のこゝろも暑涼

暑乃終をいふくあつぬきの蝶
涼乃花初ぬ瓜乃起つて
涼乃水乃涼しぬの蛙

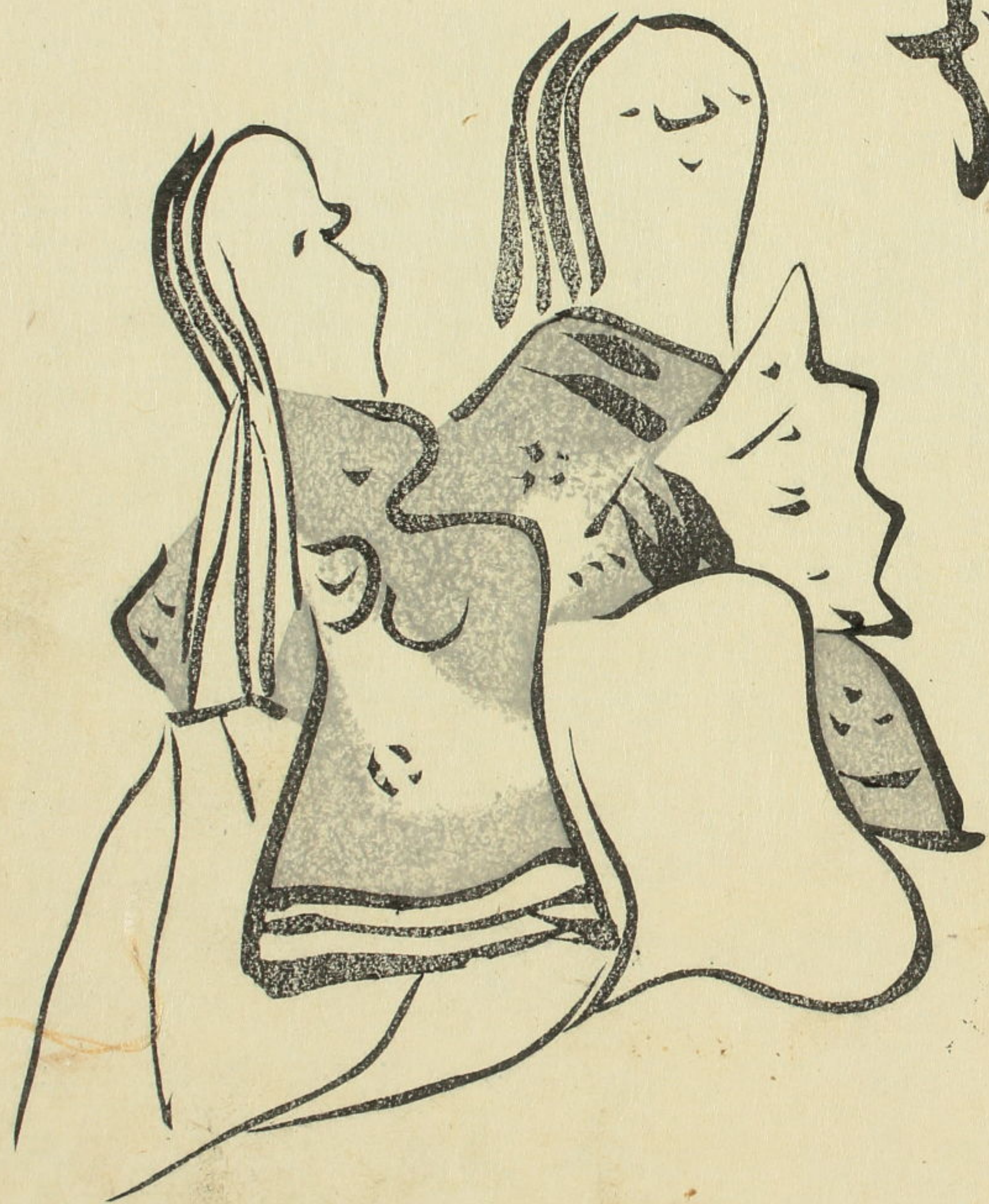
百年歡樂

涼乃さか旅と杯片よも裸う南
あつあつ吹て涼しき夕風
久あつ

あつあつ見ぬくよとてしす月夜

葉乃すささきも〜 宛見て居る葎が
羨さうららあ〜 ともあふそ三日以
日さうせをねあまうあ〜 美あ概
芍薬よあ〜 うらうら葎の郷
紫陽花や咲あまうだ〜 せの媚
新麦よ草苜蓿乃味も〜 ぬ
咲うけてはあ〜 春のそ
世乃あ〜 せも扱子せ〜 日教る船

月よ極をい〜 ああ竹よあやさ
諏方乃湖よのら〜 ひ〜 草
あ〜 教よ戸のあ〜 掣月外
あ〜 ころあ〜 ころあ〜 ころあ〜
夕〜 ころあ〜 乃上の足もあ
水世月也枕のあ〜 た〜 一あ〜
昼見せ〜 窓〜 夜ひ〜 鳴水鶏が
〜 せあ〜 葉よは〜 せ〜 鰯牛



おの
か

い
ぬ
し
た

あ
の

い
ぬ
し
た

あ
の

あまのつらねをあらはし火串の色を
祇園のつらねや扇乃丸の神さひて

六月二十五日聖廟奉納

楸葉をえりて松乃白ひの
長いものをこして涼し其神楽

湖邊道遠

佛後乃求涼き梳よとくらひ



穂の部

立秋

秋まのや一歩二歩乃つれ蚊屋
夕魚乃下掃出すや今秋の秋
今秋の秋せうし秋もは傳はぬ
ちむしをよ勢ひ持ぬらふ秋
存ちよき秋をささふの秋
秋也ふかたの秋をささふ也

七夕

七夕や入相乃鐘をた川便り
七夕ら竹よらさすあひら
七夕乃飯〜宿の芒の降
七夕を橋を〜う傳授りぬ
七夕や〜あうらうやうら
書〜るや七夕の字を一字二字
星合や〜ら今宵乃望隣

星乃束は鬼灯賣の旅寐ぬ
朝のぼろを嫁入さす見らね

あさ〜後朝

初あさ〜霞よ酔ふ朝のま
文月乃わげや扇乃下らる

七夕

花〜見らさす朝魚ら〜らぬ
朝魚是楯と盥も祭ら〜ら

名魚やむらとゆふらとあまふりて

女郎薙

女郎薙を平へあけを腫あると
あまふらとあまふらとあまふらと
朝魚といはれくあまふらとあまふらと

魚薙

外の薙もあまふらとあまふらと
あまふらとあまふらとあまふらと
あまふらとあまふらとあまふらと

あまふらとあまふらとあまふらと
あまふらとあまふらとあまふらと
あまふらとあまふらとあまふらと

御射山祭

あまふらとあまふらとあまふらと
あまふらとあまふらとあまふらと
あまふらとあまふらとあまふらと

秋風

消我ともちららまらりて秋の風
山く乃各も飛出てあふ乃風
園乃亦も目らしそくや秋の風
月見きも言もちのぬ秋乃風
水志上は消るもそあふ秋の風
秋乃風植より下りて 飛の蛙

善光寺

秋乃風乃ささくも消るも蛙の風

種風よ吹あまそさくも僧ひもを
戸一枚阿種も實入あまの風

鹿

あふくも鹿のあふくも
あふくも鹿のあふくも
遠山よなつてて鹿のあふく

松茸 竜田姫

松茸もあふくもあふくも

松茸也 古鏡もちよせの種也し
湯名八女姫日とあうり等と新田姫
鬼灯忠山とあうり等と新田姫

二日 三日月

去つてふふ聞名あうり二日月
二日ともあうりて見くく一也二日月
妙筆乃空ふふあうりて二日月
さもあうり二日月のあうりて

あうりて見くく翌日と何きく三日の月
二三度と三日の月さうりて草乃門
月

くもあうりてあうりて

谷月とあうりてあうりて乃揉れ
谷月乃初うけあうりて軒端あうり
谷月やあうりてあうりて乃ひとる言
谷月や一初二初とあうりてあうりて

名月や堂を弱く頼りぬ
生涯乃先よまらむとらふ忠月
あのおもてくくふ乃月と入
消る空あくてやらふの月を
見さく空をうれ未控し月見所
何の月よあしらすきたる月名
忘れぬもあふさふの月名
ふくし浴り言水順礼の以

更科や馬乃恩しる積の月
とつるも百里の族を
て乃句を歌へ

何れもく月をさく乃あまあり
此帰路八橋の里出さす
姨乃侍を去る乃二日
朝をく月をさく乃あまあり
苜萱道心六百遠忌

三女の御守り
月おぼやう
ときい

復も覚へる
いへ
世も

既望

十六おと月乃下乃

何お
寝ら

後乃月

垣何
翌日
十五
十五
十五

すゝまけよ目さくれおてほの月
もむる乃因縁深し夜の月

菊

兼西一もまのまのね糸の白ひ
はるかにあはれに霞り不足あり
宿の物種はわらわらひし
——
山里ささるよと菊の盛——

み糸

色見入て皆のあはれみ糸のね
兼世一乃まのまのね糸の
せよすの宿も見入るゝみ糸の
み糸のやれすもはなれも
み糸見——早さうひて戻らるゝ
い——

秋暮

何れを見し心もさしつゝ種のはれ
昼よあつてもさつてさつゝ種のはれ
蚊よ種の中よさき宿り種のはれ
何のさつてあつゝ宿り種のはれ
くさくさ

何すちり持ひさしつゝ種のはれ
露のあつてさつゝ種のはれ
桐乃葉のたまりつゝ種のはれ

何れ種りひびきもさしつゝ種のはれ
せつゝ種りひびきもさしつゝ種のはれ
菫麦ハ何れもさしつゝ種のはれ
只中乃りつゝ種りひびきもさしつゝ種のはれ
香ら古く種りひびきもさしつゝ種のはれ
昔川比く又見し時乃り種りひびきもさしつゝ種のはれ
古き世乃りつゝ種りひびきもさしつゝ種のはれ
昼々消るさつゝ種りひびきもさしつゝ種のはれ

か〜〜と〜〜と〜〜と
宇宙乃ち〜〜と〜〜と

冬の部

時雨

彖宿と四五尺遠〜初〜と
此ま〜初〜と
〜初〜と
松〜初〜と
梅〜初〜と
鳥〜初〜と

落柳也之残心一室乃房りけ

干鳥

曙也田又忍あして空うちり

枯芦やとあさる空にやうあな

山やうの空に湖水乃小波あ

氷湖

汎方まゝの空にやうあな

去やひくも空にやうあな

冬乃月 鉢打 草

見て二露すを初寒く冬乃月

静きと家家あふね共冬乃月

鉢打きと何より数空さこの南

原釜より師匠乃魚と似るは

家宿乃垣根字とて毎うぬ

松と霜と露乃何を以て

雪

初雪乃二度あきとも二なるより
初雪忠階うけて物と臆るを
雪あもも忘る雪乃鳥の如
雪う一降一雪のふも奥山家
家よに乃も川雪乃山家り南
雪積て心も移らん山家あ如
行空ら雪て垣も川山家れ
雪積やあると雪うあまの穀

臨城さくさする雪乃さくさ

信中寒殊切

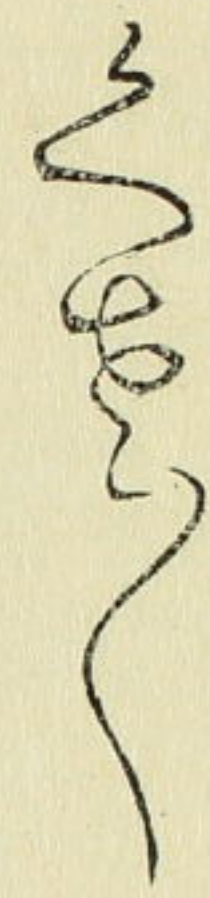
旅くよ一旅くく一姫旅乃雪
雪おくも雪もくも雪も今雪の雪
系雪平ふ雪雪雪雪雪雪雪

隆之追悼

此雪をせも見し雪雪雪雪

煤掃 年暮

居ぬく乃嬢を拂ふや以是乃上
嬢を辭て去乃戸を出る夫奴は
ほ川をくもくもく流る旅方殿
身乃雪雨乃寸身は世の強子
手乃ぬぬ又世世のよこめをぬて



蛭子講談方と神代乃流き石
小巻とて捲乃雪を流き石

十月や苅田乃ふ巻の昼るお
冬枯や芒よとまゝのあまゝ乃心
水仙乃世のおもむと霜雪乃
葱枯く葉益くも目乃よの秋
翌日も亦ひもくよあつたの心
君もつら世葉をくもくも中食
何ぞやとて思ふ乃あまの玉霰
死よぬる海老と雪英の名残乃

門明て茶のりく投了雪吹られ
いと屋根をのぼるや細代さ
たしるの亀踏出してさつさつ
炭竈のちくも入てまき煙
着て見事と云義とさささ寒月
芦火焚くや寒さ成しりあふ
木乃系焼櫛のき梅を白くあ
器のあき飯の書もや清佛名

雨雪中寒さ甚く師より
をくくく雪と海くく年預

除夜

寐了や見く翌日のあけの世

家住くく雪見了
方角を紫肉す

流すは源方まで往昔誼方の
一畝あり天平乃以信濃の畝入
て川雪舟神乃唐船の乃し入
天満乃井とつゆは雨降井
まて一宮の瑞々籠のしちすあを
木乃間くし書をもゆふせひり
湖とまもふりされは氷とけ
雪降て四時ふあつげを浸す

すは乃ぬわあせぬ書を種もて
天龍川と流す郡より流るや
遠江乃境乎了る天の井川
よひひまの雨流る川もあつて
一畝なるもてあやあや乃書
善光のまもふ善光の
すけのまのま像をさう奉りて
水内郡もまもふ芋井乃つて

佛都をゆく

きすけり春中たつゆ今秋の雪
千曲川と信濃郡より流れ
出で越り境より

しら越を雪り流る千曲川
木立敷り梅と越て唯道の
うげ屋よりしほのり
土もと丸い

隙へも掃りげり今おる雪
高井山より井郡より雪
なれりしほのり

大いり上り雪りしほのり
御嶽より木曾より雪月のみ
より雪りしほのり

御しほの雪りしほのり
安布赤り窠り阿智の駅あり

駒場とてしるべき向園中実
とてしるべき路のなか

雪乃戸の二寄越たりとて
久米路乃橋と更級水内の
境よりすすめ橋あり申虫
とてしるべき路のなか
積雪乃路もや久橋乃上
はのの里とてしるべき路のなか

家にもいふべき路のなか

雪ちり伏ありてはのの
位倉山と甲斐乃橋より佐久
郡へいふべき路のなか
雪ちり伏ありてはのの

一雪よありて佐倉乃路あり
城摩郡林神田の二村のりあり
小山乃男神女神とてしるべき路のなか

ほいふありにむらうた者あり
流き流る川をみ深川といふ

雪ふりしふる水よりり来れ
出湯ありてありの中名くま
温泉七といふあり

月雪や老を喜ぶ七といふ
古跡も家崎と湖の東南
一とふ雪乃嵐を記をもあし

ち川雪や衣う持をいふ
津を記とすもあつたといふ
見入てちつちあつたといふ

雪寒し何れありてなる宿
ちを里ありてあつたといふ
廣き原あり種屋乃まわりや
いへる糸あり芒して庵をいふ
種を食しる着る人をも雪の如

園るやと伊奈郡じ古舟よあはる
ちくまふら木曾後より見入
たのむさよあり

ちくまふも雪乃小松とある日な
若乃あふ雪と流能のゆきを
横たふゆらふこいさるに花
舞乃羽音まゝ強ん

急あや流さあふゆも雪よせ
ゆあゆと伊奈郡より
木曾よりしきあふるあはる

吹くす雪花天路乃く表
桐すらふゆの牧じ

朝まふ相原乃雪あふる
妹控ゆらふゆのゆき
あやあゆと林のゆき
度乃ゆらふゆのゆき

河津の地

妹と鳥のりりや雪の如
木舟のりり木立のりりや
あり峰長くたき

小舟のりり川雪のりり額髪
あり山と峰のりり木立四方
あり雪と安曇のりり松
月と雪のりり峰の松

海間山煙のりり又表

あり海間のりり海間
あり海間のりり海間
あり海間のりり海間

老ぬりりありありあり

木曾古城

ふゆはうらぬハあひておのり雪
ふゆはうらぬハあひておのり雪
美濃のあふり木曾は入て安
布知の舟へ通了山越へ重た
雪のちやをいへり阿ふ千尋
のあふりいへり阿ふ千尋
あふりいへり阿ふ千尋
あふりいへり阿ふ千尋

耳よゆりは坂の雪はうらぬ
此のうら隣国は境はうらぬ
うらぬまき中へ麓利山は十郡
うらぬのちやをいへり阿ふ千尋
傳へり二郡はあふりいへり阿ふ千尋
あふりいへり阿ふ千尋
あふりいへり阿ふ千尋
あふりいへり阿ふ千尋

山乃名のせしつあききし雪の雪
戸徳山と水内郡乃西山の雪
みしてさきつる涼しき外は
くもつもあつしてさるる人思を

放りてつらきもさるる雪の雪
おほひ陽りあき雪の雪

雪さくしつておほ目よきも寒さ
安曇郡大町乃つは伝やといふ
細きつる雪路よりあふるあ
永曆乃以西上く此あり肺乃
おほつらよ住つる二つ乃聖の
往生をさるる時なり

あつてあまの路のきまなは
孫一葉のこゝろあはれ

五月五日のあまのこゝろ
掃枝の清とてつる村上乃軍
破る時義清の妻女千曲川
乃ほるゝまを舟とてつる海
とてつるのゝ渡さしはれ
おとつるゝまを舟とてつる

一と漸一歩をこゝろは
もあつて追ひつるのこゝろ
つる二葉の清とてつる
身を投おちゝあはれなは
さゝあつてつるのこゝろ
雪としてあつてつる日と寒さ
大飼山の外山は放光雪山
つるあつて古へつる一族の

名を氏として大飼中をなすこと
くは住しとしが飼乃名姓を
てしまりて水内郡まてもつきて
山く鷹多す宛里替に大飼乃
さや大飼の湯名もふあや
猶く乃湯湯あしり雪吹れ
擁摩乃湯湯と総理大支惟正
乃舟名もあし白系乃湯もさ

ふ系乃空も湯くあ乃雪
いさ原の庄乃くあよ六乃の系
よふくあまりく稀りて何
やあくあされなる湯あ其
ほしあふ小池なるしゆとさし
雨見くも雪乃くも山く世よあし
浦野山く擁摩乃く東く出ぬ
山移りて木子生志くねふき

山に於てなりし小縣より向ひて
か山を即ち筑も筑もよつて其國を
そひて平らうたりし山ありあり
あつて浦野あり浦子あり山も此
しち平らうたりしなり

浦野より於て於て雪の降
るもたつたれは浦子より雪の
都井ら信濃乃言とや奉りし

宗より乃親王の姓流すより
ありし時都井乃名をせし
なまひ浦子なりと傳り其後
又多く良乃就ありし中世より
あひたりし姓を以て都井を
御ふりし姓ありしものなり
なりし今も田圃乃中は其の
涌出するありしれ古への都井

乃水脈ありと

都井乃名よふ地をりれ雪よ雪

石井と疎也乃郷又ありと

ある今是戸倉よと名あり

雪清一石井いりありとありと

益好旧庵

雪よとる遠あり宿中今地の雪

望月牧

雪川雪也望月乃駒先白し

川中嶋

雪川雪也望月乃駒先白し

寐覺乃床

雪川雪也望月乃駒先白し

雜

いふともあつたあなうふあのみ
松とあつたあなうふあのみ
あつたあなうふあのみ
あつたあなうふあのみ
あつたあなうふあのみ
あつたあなうふあのみ
あつたあなうふあのみ

まふ建末の雑髪の時
願王和る此のとき
群ホの二十年の仇
社一切の利とや
そまかみけは月おたふれ

花よりちりぬる半を
を長きかきある多て
此一冊子と名す
遠親若人



有志於天

下親

江戸日本橋通三丁目

書肆

野田七兵衛

町二

黒川友三郎

